

# 英国の大学入学者選抜における非学力的要素の評価システム

永田 純一, 杉原 敏彦, 三好 登 (広島大学)

大学入学者選抜における非学力的要素(non-academic factors)の評価内容とその方法に関して、英国の 3 大学を対象とした現地調査をもとに分析を行った。その結果、分野・コースによって非学力的要素の評価に対する重要度は大きく異なっていることがわかった。また、非学力的要素を特に重視する分野・コースでは、短時間ではなく長い時間をかけて面接が行われていることが示された。

キーワード： 大学入試, 非学力的要素, non-academic factors, 英国, GCE A Level

## 1 研究背景

我が国の大学入学者選抜方法は、新制大学が設置された後、幾たびもの改革がなされてきた。このような中、平成 26 年 12 月に中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(中央教育審議会, 2014) が示され、その後、高大接続システム改革会議等からの提言等を踏まえて、(1) 大学入試センター試験が大学入学共通テストへと変更されること、(2) 令和 3(2021)年度入試からは英語 4 技能民間試験を活用すること、(3) 主体性と他者との協働性を評価するための方法を加えること、等が示された。

しかし、令和元年 11 月の文部科学大臣による発表により(2)の民間試験活用がいったん白紙の取り扱いとなり、さらに同年 12 月には、大学入学共通テストの実施における大学入試センター試験からの最大の変更点であった記述式問題の導入が見送られることとなった。

これらの動きの基盤となる考え方としては、日本の大学入学者選抜における学力的要素への過度な配点を見直し、より多面的な観点による評価方法を確立すべきである、という点にある。入試方式に関連して言えば、総合的な判断を行う AO 入試・推薦入試による入学者の割合を高めること、さらには一般入試において多面的評価を活用することを目指す、等である。

ここで高校と大学の接続システムとして米国、日本、そして英国の 3 か国を比較した場合、英国では、高等教育へ進学する場合、自身が学ぶ分野を確定させてから進学するという点では、米国(図 1: パターン A)よりもどちらかといえば日本のシステムに近い(図 1: パターン B)。一方、図 2 に示すとおり、英国では General Certificate of Education Advanced Level (中等教育証書上級: 以下、GCE A Level と呼ぶ)と呼ばれる科目別資格試験があり、大学入学準備

とは、シックスフォーム (Sixth Form : 第 6 級) において、この GCE A Level の資格取得を目指す学びとなる(図 2 の(B))(山村, 2005, 2016; 木村, 2006; 花井, 2020)。英国の大学に入学するためには多くの場合、GCE A Level の最低基準スコアが求められる。また、米国および日本の場合には、大学進学に特化しない高等学校のカリキュラムを基盤とし、外部試験としての大学入試が実施されている(図 2 の(A))。

それではこのような「分野選択の時期の違い」や「大学入学準備のための学び方の違い」は、大学入学者選抜における人の役割(教員、アドミッション専門職等)、あるいは評価方法において、どのような影響をもたらしているのであろうか。本報告では英国において複数の大学の現地調査を実施したので、その内容をもとに日本、そして米国との比較を行い、英国における大学入学者選抜システムの特徴の分析を行いたい。

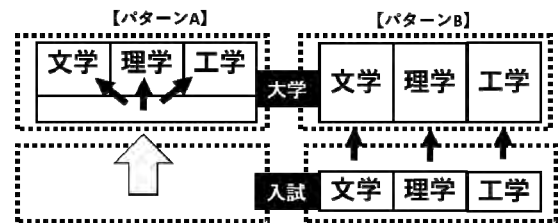


図 1 大学入試前後の分野選択

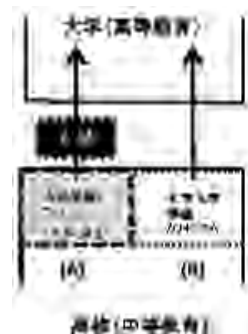


図 2 高大接続システムの比較

特に、非学力的要素(non-academic factors)「コミュニケーション能力 (communication skills), 価値観・態度・意欲 (values, attitudes and motivation) 等) について、英国の大学はどのような考えをもとに、どのような方法を用いているのかを中心に考察を行いたい。なお、ここでいう「非学力的要素」とは、我が国の大学入試改革で注目されている学力3要素のうち、「主体性・協働性等の評価」に関連するものと捉えている。

## 2 英国の大学入学者選抜システム

### 2.1 UCAS

日本とは異なり、英国においてはすべての大学への出願手続きは UCAS (The Universities and Colleges Admissions Service)<sup>1)</sup> が提供するオンラインシステムを介して行われている(山村, 2005, 2016; 木村, 2006; 文部科学省, 2016; 花井, 2020)。この場合、ある特定の分野のコースを選択する必要はあるが、同時に 5 件の出願が可能であり、複数の大学から合格が認められる。

また、この UCAS のインターネットにおけるウェブサイトでは、単に手続きのための情報だけではなく、大学で学ぶことの意義、あるいは各分野の特徴、といった大学への進学のための予備知識を提供する役割も担っている(花井, 2020)。さらに、これらの情報を中等教育の教育者と情報共有を図るために様々な会議も開催している。このような UCAS に期待される役割は、英国の資格試験制度改革において指摘されてきた「早期専門化の問題」「キー・スキル獲得機会の不足」等のさまざまな課題を踏まえた「公平な入学者選抜制度(アドミッション・システム)の確立」への志向から生じていることが先行研究において詳述されている(花井, 2020)。

### 2.2 GCE A Level

日本の高校における学習指導要領による統一したカリキュラムのシステムとは異なり、英国では、GCE A Level (中等教育証書上級)の取得を目指した大学入学準備カリキュラムが各学校の責任のもとに設定されている(M・F・D・ヤング, 2002; 木村, 2006)。実際には、複数の資格授与団体により、「目的・目標、評価する能力・技能、配点等についてのスペシフィケーション(specification)が各資格授与団体によって作成され公開されている(山村, 2016: 4)」。そしてこれら資格授与団体を「資格試験規制局(Ofqual: The Office of Qualifications and Examinations

Regulation)」が認可するシステムである(M・F・D・ヤング, 2002; 木村, 2006; 労働政策研究・研修機構, 2012)。学習成果の評価は、約 1 か月に及ぶ最終試験(外部評価)における得点が主であるが、科目によっては各学校の教員により生徒の学習への取り組みを評価する得点(内部評価)とを合算した評価がなされる仕組みである。一方、Ofqual は、2017/2018 年度からは、最終評価は原則として最終試験(exam, 外部評価)のみとし、「exam 以外の評価方法を用いることができるのは、どうしてもそれでは評価しえない場合に限定(山村, 2016: 9)」されることとなった。

「今次の改革は、A レベルはアカデミックな学力を評価する試験制度であることを明確にし、しかも特に学力上位層中心に学力水準の向上を意図すると考えられる(山村, 2016: 9)」。

さて、各大学のそれぞれのコースにおける入学者選抜においては、出願に必要な GCE A level の最低点が設定され、必要な学力レベルが提示されている。日本の場合に例えるならば、各大学の学科ごとに、大学入試センター試験に対して出願要件として最低点を設定する、というものである。ただし注意が必要なのは、GCE A Level では、前述したように、その評価点は最終試験だけではなく、通常の学校における学習への取り組みが部分的に評価対象となる場合もあり、いわゆる主体性や協働性等に関する評価を含んでいるとも考えられる。

英国の国外からの出願者に対しては、UCAS (あるいは個別の大学)によって、各国の大学入学のための試験スコアとの対応表が作成され、出願要件である最低点が、各国の試験スコアに換算された表として提示されている<sup>2,3)</sup>。たとえば、オーストラリアの ATAR (Australian Tertiary Admission Rank)、ドイツの Abitur、中国の高考(普通高等学校招生全国统一考試)、国際バカロレアの DP (Diploma Programme) スコア等である(永田ほか, 2018)。日本の大学入試センター試験の得点は、英国の大学入学レベルの試験とはみなされておらず Tariff 変換表には記載されていない。高校を卒業後、英国の大学の基礎課程(foundation program)を学ぶことが求められている。この要求は、オーストラリアでも同様で、日本の高校卒業資格や大学入試センター試験は、オーストラリアの大学への入学資格や ATAR と同レベルとはみなされていない。

表1 サセックス大学とシェフィールド大学における非学力的要素の評価方法

|         | サセックス大学               | シェフィールド大学                      |
|---------|-----------------------|--------------------------------|
| 実施対象    | 特定の志願者のみ              | 全ての志願者                         |
| 実施学部・学科 | 特定の学部・学科のみ            | 特定の学部・学科のみ                     |
| 実施形式    | 1つの会場で面接              | 8つの会場を順番に回って面接                 |
| 面接官     | アドミッション・オフィサー<br>(職員) | 教員, 若手の病院勤務医および看護師,<br>博士課程の学生 |
| 評価方法    | 各面接官が単独評価 (15点満点)     | 各会場で合議評価 (45点満点)               |

### 2.3 アドミッション・チューターとアドミッション・オフィサー

米国では、大学の入学者選抜プロセスにおいて、教員ではない専門職としてのアドミッション・オフィサー (Admissions Officer) が重要な役割を担っている。日本では、一部の大学では職員が大学入試の面接委員を務める場合もあるが、ほぼ教員が入学者選抜の実質的な担当者である。一方、今回の調査では、アドミッション・チューター (Admissions Tutor) とアドミッション・オフィサー (Admissions Officer) という2つの職種によって、それぞれ異なる役割を担わせている大学も存在した。アドミッション・チューターは学科に所属する教員であり、主には学術的な判断をもとにその選抜に関わる。その一方アドミッション・オフィサーはより客観的なデータに基づき選抜作業に関与する職員、といった違いがある。

現地調査の詳細は後述するが、米国のアドミッション・オフィサーとは異なり、英国のアドミッション・オフィサーは、それほど自身の考えや判断が選考プロセスには影響しない立場の場合もあるようで、出願者の大学教育における成功するポテンシャルを見積もるような部分は、アドミッション・チューターの役割である。しかし、これら両者が協力しながら選抜を進める、ということは無論必須のことと考えられている。今回は一部の大学の調査結果であり、英国全体についての明確な結論を示すことはできないが、英国の大学におけるアドミッションの人員体制 (システム) の詳細な調査については、今後の課題としたい。

## 3 現地調査<sup>4)</sup>の結果とその分析

### 3.1 University of Sussex

サセックス大学は、イースト・サセックス州ブライトン近郊にある総合大学で、13学部で構成されている。多くの学部において学力的要素 (A-Level

スコア等) を重視した入試制度をとっている。しかし、ドラマ・映像学、医学、幼年次教育学、デザイン学や、社会教育学、といった特定の学部・学科かつ、ボーダーライン上にいる学生のみを対象としてはいるものの、インタビュー、ポートフォリオ評価や、ワークショップを行うことを通じて、本研究において焦点を当てているコミュニケーション能力 (communication skills) や、価値観・態度・意欲 (values, attitudes and motivation) などの非学力的要素を評価する仕組みもある。これらの学部・学科のうち、医学部 (Medical School) におけるインタビューの面接官は、5名のアドミッション・オフィサーが担っており、後述するシェフィールド大学とは異なって、1つの面接会場 (面接時間: 30分) で実施している。またインタビューでは、その一つとして以下のような質問を行うことを通じて、志願者の非学力的要素の評価を行い、可否を決定している。

“Medical School around the world receive far more applications than there are places. This means that many excellent applicants will receive no offers. If this happens to you, what will you do? (世界中のどの医学部でも、定員以上に多くの志願者が集まる。このことは多くの優秀な志願者が不合格となることを意味している。もしこれがあなたの身に生じたとしたならば、あなたはどのようにしますか)。”

志願者の回答を受け、5名のアドミッション・オフィサーは、合議することなく、それぞれの判断において、Excellent=3, Satisfactory=2, Poor=1の3段階で、コンピュータ上にて評価していく方法をとっている。したがって、志願者は15点満点で可否が決まることとなる。ボーダーライン上にいる志願者のみをインタビューに招くということであるが、評価に客観性を持たせるために同じアドミッ

ジョン・オフィサーが、1 つの面接会場において時間をかけてインタビューを行うという、手間のかかる仕組みをとっている。

### 3.2 The University of Sheffield

シェフィールド大学は、サウス・ヨークシャー州シェフィールド市にある国立大学であり、大規模研究型大学であるが、特に医学部 (Medical School) で秀でた大学である。2019 年度入試における医学部の入学定員は 306 名であり、その入試制度は、書類審査, University Aptitude Test (以下, UCAT と呼ぶ), Multiple Mini-Interview (以下, MMI と呼ぶ) の 3 つから成っていて、これらによって合否を判定する。

これら 3 つのうち本研究で着目する、コミュニケーション能力 (communication skills) や、価値観・態度・意欲 (values, attitudes and motivation) などの非学力的要素は、MMI で評価される。シェフィールド大学医学部では、前述したサセックス大学が、志願者数の多さから限られた学部・学科でかつ、ボーダーライン上の学生のみ対象にインタビューするのは大きく異なり、すべての志願者 (2019 年: 約 1300 名) に対してインタビューを行う。MMI では、志願者は 8 つの面接会場を順番に回ってインタビューを受けていくこととなり (1 つの面接会場当たりの面接時間: 8 分間), 面接官は教員だけに留まらず、若手の病院勤務医および看護師や、博士課程の学生など多岐に渡っている。これら面接官は定期的にその素養を磨くために研修を受けており、それらの面接官が志願者の医学における専門家としての素質や、価値観 (Personal Qualities and Values) を探るために、その一つとして以下のような質問を行っている。

“While working at your Saturday job in a shop you find that one of your colleagues has arrived at work smelling of alcohol. They appear to be intoxicated, and you know that they drove to work. What actions would you take?” (お店で土曜出勤しているときに、同僚たちがアルコールのにおいを漂わせて、車で出勤してきた。彼ら/彼女らは酔っているように見える。あなたはどんな行動をとりますか)。

その志願者の回答を受け、各面接会場において面接官らは合議の上、Excellent=5, Good=4,

Satisfactory=3, Borderline=2, Unsatisfactory=1, の 5 段階を志願者に与える。したがって、志願者は MMI の 8 つの面接会場において合計 40 点満点で合否が決まることとなるが、これに UCAT Situational Judgement Test (以下, SJT と呼ぶ) (5 点) が加味され、最終的には合計 45 点満点で決定される。

以上、前述したサセックス大学およびシェフィールド大学の非学力的要素の評価方法をまとめたのが、表 1 となる。サセックス大学が、同じ面接官で 1 つの面接会場においてインタビューを行うことで、客観性が保たれた評価形式と考えているのに対して、シェフィールド大学では、違う面接官で複数の面接会場においてインタビューすることで客観性が保たれると捉えており、その評価形式を巡っては、これら二つの大学において大きな差異があることがわかる。またサセックス大学では、合議することなく、それぞれ面接官が各自の持ち点の範囲で評価していく一方で、シェフィールド大学においては、合議の上、すべての面接官でトータルに評価するという、その評価方法でも全く異なっていることがわかる。学力的要素の評価とは違い、非学力的要素は捉えにくいものであり、その評価方法を巡っては議論が絶えないところではあるものの、これらの大学の経験は今後、非学力的要素も含めて面接で測定していかなければならない日本の大学にとって資するものであると考えられる。

### 3.3 Cardiff University

カーディフ大学は、ウェールズ王国の首都であるカーディフに設置されている総合大学で、3 つの College (College of Arts, Humanities and Social Sciences, College of Biomedical and Life Sciences, College of Physical Sciences and Engineering) により学士課程が提供されている。今回の調査では、大学全体のアドミッションの長 (Head of Admissions), 留学生リクルートを担当する教員 (Deputy Head of International Recruitment), 現代言語学部 (School of Modern Languages) の職員 2 名 (Admissions and Recruitment Officer, International and Employability Officer) の計 4 名と我々とのミーティングを持ち、インタビューを実施した。

現代言語学部では、世界中から学士課程の学生を募集していることから、特に、英国外の中等教育の学習レベルについて詳細な情報を有していること

がうかがえた。さらに、大学全体の共有財産として、98 か国もの国外の中等教育卒業資格等を分析し、英国の GCE A Level のグレードとの換算や対応するレベルの詳細な一覧表を作成している<sup>3)</sup>。これは、主に、インタビューを行った大学全体のアドミッションに関わる教員と、留学生リクルート担当教員の2名を中心に作成しているとのことである。なお、日本の高校卒業者は、直接カーディフ大学の学士課程には入学できず、1年間の基礎課程を学ぶ必要がある。

非学力的要素の評価としては、まずは、UCAS へ提出する Personal Statement<sup>6)</sup> (オンラインで入力)を全学で利用している。日本の大学入試でいえば、志望理由書に近いものである。たとえば、なぜこのコース(学士課程)を選んだのか、どのような興味があるのか、志望するコースに関連して秀でた能力を示すものがあるか、等である。

米国とは異なり、日本と同様に就願時に特定の分野を選択することから、選抜する側としては、同じ分野の中でいかに優秀な志願者を選抜するか、が重要なポイントになる。志願者の総合的な評価というよりも、やや分野特有の特徴が強調されるのではないだろうか。我々のこれまでの研究(永田ほか、2020)において米国(カリフォルニア州)における州立大学で活用されている同様の資料「Personal Insight Questions」<sup>7)</sup>は、UCAS の Personal Statement とは異なり、秀でた能力だけではなく、それらの能力を得るのにどのような困難を克服したのか、また最大の挑戦はどのようなことだったか、そしてその挑戦をどのように成功させたか、といった内容であった。このような違いは、入学後に幅広く自身の専門(major)を選択できるシステムがあるからこそ、問われているものと考えられる。

一方、UCAS の Personal Statement は、学士課程のコース(分野)ごとに、入学者選抜における重要度は異なっている。現代言語学部では一定の重要度をもっているが、医学コースではあまり重要視されていない。医学コースでは、シェフィールド大学と同様に、面接をかなり重視しており、最終合格者は面接を経なければ決定されない。面接を受けられる出願者は、学力的要素だけで選考されている。面接の方法は、シェフィールド大学の方法と同様に、複数の面接委員がいる10のテーブルを順番に回り、それぞれのテーブルにおいて質問を受け、回答を行う、といったスタイルである。各テーブルでは6

分間程時間をかけ、医師としての資質に関わる内容の質問をうける。10のテーブルを回ることから、受験者は全体で60分以上の面接を受けることになる。このような面接は、1日で終了せず、3週間をかける(例:2017/18 アドミッションの場合、「2016年11月30日~12月14日、2017年1月18日~1月25日」)<sup>8)</sup>。

実際になされている質問内容の詳細については今回は確認できなかったが、質問者にとって答えにくい、あるいはストレスになる内容もあるようである。今回のインタビューに答えたアドミッション担当者からは、医師になるためにはストレスに強くなければならず、そのために面接では厳しいことを尋ね、強いストレスへの対応力を見る必要がある、とのことであった。

#### 4 まとめ

日本と同様に、大学進学時に学士課程で学ぶ分野を決定する英国の大学について、入学者選抜における非学力的要素の評価方法に関するインタビュー調査を英国現地で実施した。

大学によっていくらかの差異はあるものの、選抜性の高い医学系コースでは、いずれの大学においても面接を重視し、分野の特性に適した資質を極めて積極的に評価しようという姿勢があることがわかった。また、面接では、多様な質問、多様な面接委員、そして短時間ではなく1時間近く、あるいはそれ以上の時間をかけている。米国とは異なり、かなり教員の関与もあることから、どちらかといえば日本の実施形態に近いともいえる。一方、学力的要素でほぼ合否が決定される場合もあり、一概に非学力的要素の寄与が高いともいえない。

なお、今回の調査対象大学のうち2大学は英国の有力大学グループである Russell Group<sup>9)</sup>に属していることから、今回得られた結果が、このような有力大学に限定されるのか否かについて、今後明らかにする必要がある。今回の調査に限定すれば、Russell Group に属さない大学は、入学者選抜の面接にかかる時間やコストが他の2大学より少なかった。

今回の分析は、一部の大学の特定の分野に限定されているが、今後、大学進学率の向上や Sixth Form への進学状況の変化等も踏まえた上で、英国の大学全体を対象とした分析を行う必要がある。日本、米国、そして英国の3か国を比較分析することにより、我が国の大学入学者選抜における非学力的

要素の評価方法の改善に資したいと考える。

## 注

- 1) UCAS : The Universities and Colleges Admissions Service :  
<https://www.ucas.com/> (2020 年 3 月 30 日) .
- 2) UCAS Tariff tables,  
Tariff points for entry to higher education from 2021,  
November 2020.  
<https://www.ucas.com/file/63536/download?token=sxmndfCS-> (2020 年 11 月 20 日) .
- 3) INTERNATIONAL AND EUROPEAN  
QUALIFICATIONS UNDERGRADUATE  
EQUIVALENCIES - 2021/22 entry, Cardiff University.  
[https://www.cardiff.ac.uk/\\_data/assets/pdf\\_file/0011/911369/UG-Combined-Equivalencies-Table-2021-22-entry-updated-Apr-2020.pdf](https://www.cardiff.ac.uk/_data/assets/pdf_file/0011/911369/UG-Combined-Equivalencies-Table-2021-22-entry-updated-Apr-2020.pdf)  
(2020 年 11 月 20 日)
- 4) 訪問調査日 : University of Sussex (2019 年 12 月 10 日,  
Cardiff University (2019 年 12 月 11 日), The University  
of Sheffield (2019 年 12 月 12 日).
- 5) SJT は, 倫理観 (ethics), 誠実性 (empathy), コミ  
ュニケーション能力 (communication skills) や, チーム  
ワーキング (team working) など含めた非学力的要素  
を測るもので, 合計 69 の質問に対して 26 分間の選択式  
で回答するものである。SJT について詳しくは次の URL  
を参照のこと。  
([https://www.themedicportal.com/application-guide/ucat/  
ucat-situational-judgement/](https://www.themedicportal.com/application-guide/ucat/ucat-situational-judgement/)) (2020 年 3 月 30 日) .
- 6) How to write a UCAS Undergraduate personal  
statement :  
[https://www.ucas.com/undergraduate/applying-universit  
y/how-write-ucas-undergraduate-personal-statement](https://www.ucas.com/undergraduate/applying-university/how-write-ucas-undergraduate-personal-statement)  
(2020 年 3 月 30 日) .
- 7) Personal Insight Questions, University of California:  
[https://admission.universityofcalifornia.edu/how-to-apply  
/applying-as-a-freshman/personal-insight-questions.html](https://admission.universityofcalifornia.edu/how-to-apply/applying-as-a-freshman/personal-insight-questions.html)  
(2020 年 3 月 30 日) .
- 8) Admissions Policy for Undergraduate Programmes in  
Medicine, School of Medicine, Cardiff University,  
2017/2018.
- 9) Russel Group  
<https://russellgroup.ac.uk/about/our-universities/>  
(2020 年 11 月 20 日).

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 17K04555 の助成を受けたもので  
す。調査にご協力いただいた英国の大学及び高等学校の関係  
者の皆様に感謝いたします。

## 参考文献

- 中央教育審議会 (2014). 「新しい時代にふさわしい高大接  
続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選  
抜の一体的改革について (答申) (中教審第 177 号)」,  
平成 26 年 12 月 22 日.
- 花井渉 (2020) 「イギリスにおける専門的なアドミッシ  
ョン・オフィサーの養成・研修に関する研究—「アドミッシ  
ョンにおける専門性開発支援 (SPA)」に着目して—」  
『大学入試センター紀要』, **47**, 1—12.
- 木村浩 (2006) 『イギリスの教育課程改革』, 東信堂.
- M・F・D・ヤング (2002) 『過去のカリキュラム・未来の  
カリキュラム—学習の批判理論に向けて—』, 太田直子  
監訳, 東京都立大学出版会.
- 文部科学省 (2016) 『諸外国の初等中等教育』, 文部科学省  
生涯学習政策局 編著, 明石書店.
- 永田純一・杉原敏彦・高地秀明 (2018) 「高等学校にお  
ける評価を活用した大学入学者選抜の国際比較」『大学入  
試研究ジャーナル』, **28**, 75—80.
- 永田純一・杉原敏彦・三好登 (2020) 「米国の高校教育と  
大学入試における主体性の評価について」『大学入試研究  
ジャーナル』, **30**, 228—233.
- 労働政策研究・研修機構 (2012) 「第 1 章 イギリス」『諸  
外国における能力評価制度—英・仏・独・米・中・韓・E  
U に関する調査—』, JILPT 資料シリーズ, No.102. 23—  
54.
- 山村滋 (2005) 「イギリスにおける接続改革—「カリキュ  
ラム 2000」の検討」『高校と大学の接続—入試選抜から  
教育接続へ—』(荒井克弘・橋本昭彦編 (2005)), 玉川  
大学出版部, 255—276.
- 山村滋 (2016) 「イギリスにおける大学入学者選抜制度改  
革—GCE 試験制度改革の分析—」『比較教育学研究』, **53**,  
3—13.